

ナミビア（ナミビア共和国）

アフリカ南西部に位置するイギリス連邦加盟国。ドイツとイギリスの植民地、南ア統治、さらにナミビア独立戦争を経て 1990 年に独立。国名はナミブ沙漠にちなみ、サン族（旧称ブッシュマン）の言葉で「何もない」の意味。民族はサン族、ヒンバ族などの黒人が 88%、ドイツ人中心とする白人が 6%、人口の 90% 近くがキリスト教である。

産業は伝統的な牧畜の他にダイヤモンドやウランなどの鉱業で、経済的には南アへの依存度が高い。近年、世界最古の沙漠といわれるナミブ沙漠をはじめ、アメリカのグランドキャニオンに次ぐ規模の峡谷、沙漠で 1,000 年以上も生き続けるキシウテンガイ（植物名）、狩猟採集生活を送るサン族やヒンバ族、さらにはエトシャ国立公園などの動物サファリ観光が注目を集めている。

右：ダグアナッツ^(*) 細工

（*）ダグアナッツは、色と光沢が象牙に似ているのでアイボリーナッツとも呼ばれている。プラスチックが出回る前はボタン、チェスや傘の柄などの材料として利用。象の命が犠牲にならないのでベジタリアンアイボリーとも呼ばれている。黒い部分は皮で、栗の渋皮にあたる



＜ナミブ沙漠＞

世界 1 古く、美しいというナミブ沙漠は、海岸から 70 km のところに幅 50～160 km、長さ 1,300 km にも達する海岸沙漠である。南アフリカとナミビアの国境、オレンジ川によって運ばれ



ナミブ沙漠の砂丘（砂丘の上と下に人間が見える）

てきた酸化鉄を含む赤い砂が海に流れ出て、ベンゲラ海流によって北に流され、海岸に打ち上げられる。これが西風によって内陸に運ばれ、8,000 万年もの長い年月をかけて堆積、形成された沙漠

である。最も高い砂丘は高さ 300m にも達し、世界最大級だという。

沙漠の東端に位置するセスリエムのキャンプサイトを、公園の開門時間 5:15 分に合わせて未明に出発した。最も美しい砂丘の 1 つデューン 45 に登って日の出を迎えるためだ。浅い涸れ川に沿って 60 km、車は砂丘に向かって走った。

30 代半ばの若者が駆け出していった。そして、砂山の尾根状のところを登り始めた。柔らかく深い砂は 1 歩ごとに潜って、半歩はすり落ちる。地元、湯殿山の近くにある「三足一分山」が脳裏に浮かんた。ゼンマイの豊富な山だが、あまりの急坂で登るのに苦労するところからついた山名だと古老から聞いたことがある。高さ 100m ほど登ると傾斜が緩くなった。一息ついて日の出を迎えた。陽光の陰の砂山は真っ黒で、朝日を受け始めた砂山は赤く染まった。そして、太陽が昇るにつれて、赤色が微妙に変化していく。振り返ると、登ってきた足跡は人、人に埋まっていたが、人の声よりはシャターの音の方が静寂を破っていた。

＜サン族＞ — 旧称ブッシュマン

カラハリ沙漠のサン族は、ザイール北西部イトウリの森に住むピグミー族、タンザニアの内陸部に住むティンティガ族、自称ハツアピと並んで昔ながらの狩猟採集を続ける民族で知られている。

資料には、「ブッシュマンは南アフリカに推定 2 万年前から住んでいるナミビア最古の民族です。ナミビアにはおよそ 3 万人のサン族（旧称ブッシュマン）が生活しているが、未だに伝統的な生活様式で暮らしているのは 2 千人だけです。彼らは自然と生態を深く理解し、環境と調和して生活を送っている」とあった。

幹線道路から逸れて、幅の狭い砂地の道を車で 20 分ほど進んだところが彼らのホームステードで、「案内人が来るまでここで待つように」の立て札があった。子ども達が集りはじめ、たどたどしい英語を話す男性が禪姿で現れた。彼の案内で、背丈を越す木々の混じるブッシュの中を 20 分ばかり進むと、20 人ほどが焚き火を囲んでいた。その背後に枝を円形に立て、草で葺いた半円形状の簡単極まりない住居があった。



男性の出で立ちは禪だが、お尻のところに突起物があり、貝の飾りが付いていた。女性は男性と比べものにならない大きな腰皮と片方の肩から下げたなめし皮だ。斧やナイフ、弓矢を持っているは、食料調達のためだ。背は低く、勇猛果敢とか好戦的とは程遠いというより縁のない人々に思えた。

彼らは、今日のように限られた乾きった乾燥地ではなく、かつては南部アフリカー円、かなりの広範囲を生活の舞台にしていたことは、彼らの残した岩絵の分布から容易に解かる。しかし、今日ではより優勢な農耕民族や牧畜民族に追われ、さらには政府による近代化政策の名の下で定住生活が強いられ、従来からの採集狩猟生活は放棄せざるを得ない状況に追い込まれているという。



貝殻でお洒落



自然の水瓶（球状の木の根）

＜サン族の丸い家＞

住居の様式は極めて多様である。材料は自然条件に大きく左右されるし、住む人々の生活様式が加味されるからである。日本に限っても、徒然草五十五段に「家の造りやうは、夏をむねとすべし。…」とある。夏の高温多湿を指摘し、風通しを良くするため解放式の家屋を…と述べている。日本の家屋を研究している外国人は、「寒い冬をもつ国の熱帯風住居」と言い表している。

ところで、アフリカの田舎で見かける家の多くは円形である。また、野生動物目当ての観光客の集まるホテルの建物も円形をしたものが多かった。ナミビアの北部でサン族のホームステード内でキャンプした。彼らの家も円形であった。直径2～3mの鳥籠のような半円形で、枝を円形に立て草で葺いた簡単極まりないものであった。エチオピアのコンソで泊まった宿も円形で、2mほどの土壁の上に円形の屋根が乗ったマッシュルームハウスだった。

アフリカの家に円形が多いのは何故だろうか。理由として考えられるのが、乾燥地の風に対する強度、室内の保温性や効率的な採暖などが考えられる。これまで何人かに「アフリカの家は何故円形？」と質問してきた。アフリカの伝統的な造り方などの答えが多かった。ケニア人に同じ質問をした時、即返ってきたのが「経済的」であった。

【資料】 先住民サン

サンは南部アフリカ「最古の先住民」の一つとされ、南アの国章にもその姿が象徴的に盛り込まれている。祖先は純粋な採集狩猟民で、ボツワナやナミビア、南ア北部のカラハリ沙漠周辺、アンゴラ南部など南部アフリカに広く暮らしている。南ア・キンバリー周辺には、サンのうちクウェ、クン人が多く住む。かつて欧州人に「ブッシュマン」と俗称と呼ばれたが、現在では牧畜を営む先住民コイコイとあわせて「コイサン」と呼ばれる。舌打ちの音(吸着音)を交える言語的特徴を持つ。

(10/10/01 毎日新聞 8面「先住民の誇り取り戻せ」)

＜野生動物＞

アフリカというと、広大で野性的な自然を思い浮かべる。そこには、日本では少なくなった手つかずの自然への憧れもが反映されている。アフリカの保護区、国立公園は、日本と違って自然を守るといことは、極力人手を加えないことを基本にしていた。とはいっても、開発事業の進行や沙漠化などで野生動物の生息地域は減少しているという。例えば、1970年代に約120万頭だった

野性の象は約 60 万頭激減していると資料にあった。加えて、政情不安や汚職などが絡んでの密猟、密輸も絶えることがないのが現状なのだろう。

ナミビアのエトシャ国立公園で、キャンプサイトを変えて2泊した。公園は、エトシャ パン（乾いた湖）周辺と、その西方に広がる半沙漠地だった。エトシャパンだけでも長さ 120 km、幅 70 km、干上がっており、地平線の彼方まで続いていた。もともとの公園は 10 万km²あったというが、今は 2.2 万km²だという。それでも日本の四国 4 県を合わせたよりも広い。ここでウォーターホールを巡りながら動物との出会いを求めた。



ガイドブックに野生動物の宝庫とあるだけに、天を突くようなキリンが木立の中で餌をあさり、遠くに、近くにシマウマが群れ、5～6 頭の象が歩く姿は迫力に満ちていた。ガゼル、インパラ、オリックス（上写真右）が草を食んでいるかと思うと藪の中へ軽やかに跳躍して消えていく。突然、車の前にサイが現れ、こちらを睨む。ジャッカルとハイエナはちょちょこと落ち着きなく動き回っていた。親子のイボイノシシ（上写真左）は気難しそうな表情をしているが、尻尾



をぴんと立てて走り去る姿は笑いを誘った。遠くに枯草の中に黒いヌーが見える。木陰に首を食いちぎられたキリンが横たわり、腹部にライオンが群れていたが、動ずる気配もなかった。どの動物も動物園でみるとは大違いで美しく、しなやかで、艶があった。

<園芸名：キソウテンガイ>

園芸名「奇想天外」、和名は「沙漠万年青」（サバクオモト）という植物の名前である。スワコップムントでのフリータイムを利用して、これを目当てに沙漠に向かった。礫沙漠の平原を車で 1 時間も走るとムーンランドの異名をもつところだった。数億年前、スワコップ川が表面の土壌を押し流した結果、地球の地肌が剥き出しになったところだという。映画「猿の惑星」の撮影現場となったというから、温帯に住み、培われた常識的な風景とはかけ離れていた。遠望する限り緑は見当たらない。黒、白、茶褐色の岩肌の山々が重なり合っていた。

アロエを茶色に色付けしたようなもの、硬く鋭いトゲの茎に黄色っぽい花を咲かせ、シャカの頭のような実をつけるもの、茎を折るとクリーム状の白い毒液が滲み出るもの、からからに干上がっ

た地衣類や花に水を吹きかけると瞬時に息を吹き返して世代交代の準備を始めるものなどなど不思議な世界であった。

目指す「奇想天外」とは、ムーンランドの乾ききった最奥部、荒涼とした山間で出会えた。岩山の麓に散ばるように大小様々点々としていた。結構、孤独に生きている印象を受けるのは、大きいものは周囲 5m、根は地下 3～4m、周囲 20m にも達するというから、互いに寄り添っていたら共倒れの可能性があるだろうし、繁殖のために近くに…ということになるのだろうか。

ダーウィンに「植物界のカモノハシ」と言わしめたものだけに、名称だけでなく形も奇妙だ。短い茎先の 2 枚葉が、巨大な昆布のように地上をのたうち回るように伸び、絡みあっている。グロテスクといえばそれまでだが、手を貸して揃えてやりたいほどだ。葉の成長が年間 1 cm 程というから、1,000 年間も生き続けていることになる。一体何歳になったら生涯を終えるのか、自分の生きてきた時間と比較にならない遥かなものを見ると、何か無力感に襲われてしまう。

発見者であるオーストリアの植物学者、ヴェルヴィッチの名をとったとされているが、植物自体が奇想天外なものであるが、園芸名として付けられた「キソウテンガイ」もまた、驚きに値する奇想天外な名付け方といえる。名称も、生育場所も、形状も、全てが異世界感に満ち溢れたものとの出会いであった。



ボツワナ（ボツワナ共和国）

南部アフリカの内陸に位置し、南アフリカ、ナミビア、ジンバブエ、ザンビア^(*)に囲まれた内陸国である。ボツワナとは「ツワナ人の国」の意味で、国民の約 9 割はツワナ人で、人口 200 万人（2011 年）である。

1966 年に独立したが、最貧国の一つであった。初代大統領のセレツェ カーマは、南アフリカの

アパルトヘイトの人種差別を反面教師とし人種間の融和を重んじ、周辺国との関係悪化を避ける慎重な政策を取ったことで知られる。

独立直後の 1967 年に国内で世界最大規模のダイヤモンド鉱山が発見され、その採鉱事業は、ボツワナ経済の中心となっている。ダイヤモンドだけで、GDP、国内総生産の 1/3 を超え、輸出総額の 75%から 90%、国の歳入の約半分を占める。その他の鉱物資源としては、銅やニッケルなどがあり、これらの輸出によって外貨を得ている。この収益が初等教育、医療、産業基盤及び公共の福祉などの分野に回されたことが、ボツワナの経済発展の礎となり、GDP は世界水準の 70%に達し、南アフリカを上回りアフリカ 4 位の中所得国に成長している。

(*) ボツワナとザンビアの国境はわずか 150mで世界最短

＜オカバンゴ湿地帯＞

ボツワナは見渡す限りの平原が広がる盆地の中央部にある。大半はサバナ気候だが中西部にカラハリ沙漠が広がっている。沙漠の北に面積 25,000 km²、世界最大級のオカバンゴ湿地帯が広がる。水源は、隣国アンゴラの高原地帯に降った雨が、数千キロの距離を数ヶ月かけて流れてくる。水は海に出ることなく、カラハリ沙漠、アフリカの大地に吸い込まれて消える。

サバナと沙漠のボツワナにとって水は最も貴重な資源である。この水を灌漑用水として利用する計画があった。しかし、冬季に増水して洪水、湿地帯拡大することから住宅地に向かず開発が進まなかった。このことが幸いして、自然保護の観点から貴重な自然が残った。

政府はこの地域の開発や大規模な観光開発は行わず、生態系を乱さない範囲での観光開発を推奨し、エコツーリズムを推進した。そのため、オカバンゴ湿地帯の玄関口であるマウンには小さなホテ



ルやバンガローが建ち、欧米を中心に世界中から観光客が訪れるようになった。今日では、オカバンゴ湿地帯の観光はダイヤモンドに次ぐボツワナ政府の収入源となっているという。旧ソ連のアラル海に見られる消滅の危機と塩害、日本の諫早湾の干拓に絡むごたごたを見ると、どちらの国の方

が確かな先見の目をもっていたのか考えさせられてしまう。

【資料】 ソウ 350 頭超 謎の死 ボツワナ「前例のない規模」

アフリカ南部のボツワナで5月以降、350頭以上のゾウが死んでいるのが見つかった。複数の欧米メディアが3日までに地元当局などの話を基に報じた。ゾウの死骸は、野生動物が多く生息するオカバンゴ湿原地帯付近で見つかった。死ぬ前に円を描くように歩いていたとの目撃情報もある。牙が残っているため、当局は象牙目的の密猟の可能性は否定。検体を採取し、南アフリカなどの研究機関で調べている。

(2020/7/4 毎日新聞)

その後、何らかのウイルスか細菌感染による可能性が高いとの見方が報じられているが、原因は解っていない。

＜チョベ国立公園＞

ボツワナ北端部にあるチョベ国立公園は、ケニアのマサイマラやタンザニアのセレンゲティと並んで野生動物が多く生息している地域のひとつである。チョベの最大の特徴はアフリカゾウの生息数の多いことである。現在でも50,000頭で、アフリカ大陸で最も生息密度が高い。さらに将来的に見ても地球上で最も多くのゾウが生息し続ける場所とされている。

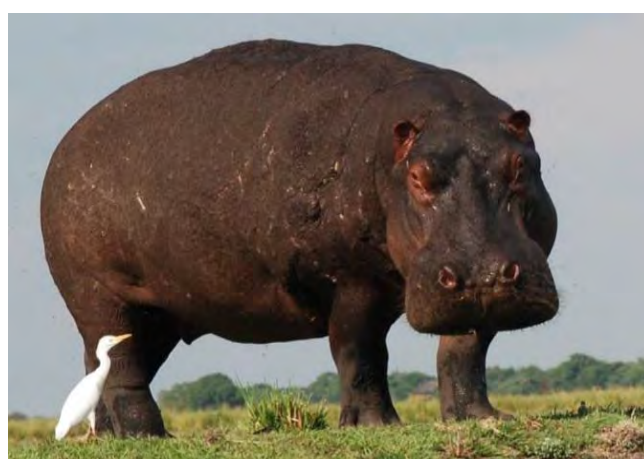
ボツワナの国立公園を回る旅の中継地となるのがハポローネで、おそらくアフリカの都市で最も外国人旅行者が安心して歩ける街の一つである。人々は白人やアジア系の旅行者



を見てまったく気にしない。車から降りることはもちろん、窓を開けることもできないと言われるヨハネスブルグのダウンタウンとは大違いである。

＜カラハリ沙漠の宝石＞

オカバンゴ湿地帯のボートサファリは、パピルスや葦の群生する水路の中を進む。モコロという木をくり抜いた小さな舟で、身動きができないほど狭く、定員は船頭を含めて3名である。聞こえ



てくるのは、静かに櫓で水をかく音と風のみである。水は薄い茶色で生ぬるかったが、黄色のウォ

ーターリシェとウォーターリリー、白やピンクの睡蓮が水面を埋め尽くしていた。モコロでじっとしていると座禅でもしているような気分になってくる。

陽が西に傾き水面が茜色に染まり始めると、睡蓮の花が、船頭の姿が溶け込んで一幅の絵画になっていた。突然、「グワー」と周囲の静寂を破る音が響いた。カバである。夢の境地から我に返った。ここは手つかず自然の中であった。

＜ウムババ島でキャンプ＞

オカバンゴ湿地帯をモコロで 40 分程の島にテントを張った。野生動物の縄張りの隅っこを間借りしてのキャンプである。自然界との境など何もない。焚火が見えなくなるところには行かないようにとの注意があった。

夕食後、船頭兼ローカルガイドたちが焚火を囲んで歌い踊り始めた。日常生活の一コマという感じで、何の気負いもなく見るからに楽しそうだった。楽器など何もない。いろんな音階の歌に合わせて体が動く。即興ではないだろうが日常生活の中で自然に生まれた音と動きで、音楽とダンスの原点を感じさせられた一時だった。



＜丸腰のウォーキングサファリ＞

早朝、ウォーキングサファリに出た。ガイドはじめ誰しものが丸腰で棒切れ一本持っていない。裸地にライオンの足跡があった。シマウマの子どもが首から血を流して息絶えていた。一瞬、緊張感が走った。ガイドが近づき、少し間を置きみんなが近寄った。まだ死後硬直も始まっていない生々しい姿だった。

遠くにシマウマの大群が見える。足元にはバッファローの頭骸骨が転がっていた。立木の皮が剥げたのは象が体を擦りつけたものだという。象の糞から細長い飴色の繊維を拾い上げた。ロープの材料だという。1 時間ほどのサファリだったが、自然界の空気、音、静寂、匂いそして緊張感を味わい、日常生活で忘れかけていた動物の本能を呼び戻した貴重な時間でもあった。

キャンプ地に戻った時、ガイドが南部アフリカの握手の仕方を教えてくれた。普段の握手で Peace! 手のひらを滑らせ相手の親指を握って Love! 握り直して普通の握手に戻って Happiness! だという。

右上：ワニの歯ネックレス（ボツワナ） クロコダイルやアリゲーターなどワニの仲間

の革は高級バッグとして利用されているが、牙もネックレスやブレスレットなどの装飾品として利用されていた（チョベ国立公園）



＜ザンビアとジンバブエ国境のヴィクトリアフォール＞

チョベ国立公園の北の境界沿いをチョベ川が流れている。アンゴラの高地を水源とし、カラハリ沙

漠を流れ、下流でザンベジ川となる。そして、ザンビアとジンバブエの国境にヴィクトリアフォールがある。

滝付近で川幅が1,700mに広がる。周囲は見渡す限りの平原で、日本人の感覚である滝をつくるはずの山も、溪谷もない。突然、川幅がそのままの横一直線に裂け、水は100m下に吸い込まれていくのがヴィクトリアフォールであった。規模、水量ともに南米のイグアス滝と並



ぶ世界屈指の大瀑布である。三大瀑布に数えられているナイアガラ滝は、この2つに比べるとあまりにも小さすぎる。しかし、ナイアガラには冬の美しさがある。周囲に飛び散った飛沫が、ありとあらゆるものを濡らし、瞬時に凍りついた美しさは他の2つにはない。

ムシ オ ツニャ (Mosi-oa-Tunya)、「雷鳴のとどろく水煙」と現地語で呼ばれていたが、当時、イギリスの女王「ヴィクトリア」にちなんで滝の名前を変えたのは、イギリスの探検家デイビッドリビングストンであった。彼は大陸の西海岸に通じる水路を求めてザンベジ川をカヌーで下っているとき、1855/11に出会った。しかし、彼が驚いたのは滝そのものよりも、落下した水が流れ出す広い谷がなく、滝の落ち口からわずか75m下流に、同じような岸壁が向き合って立ち塞がり、滝壺は岸壁に囲まれていたことだったという。滝幅1,700mのうち、1,200mはザンベジ側で、残りはジンバブエに属している。そして、双方の国で世界遺産に登録しているが、ジンバブエはヴィクトリアフォール、ザンビアはムシ オ ツニャとなっていた。

滝の水量は、雨季と乾季では10倍の差があるという。この流域の雨季は11月末から4月初め、そして、2ヶ月遅れで滝の水量が変化するという。ケープタウンからナミビア、ボツワナ経由でザンビアのリビングストンに入ったのが11月末で、最も干上がった時期に訪れたことになる。ザンビア側からのヴィクトリアフォールは全く迫力を欠いていた。雨季には飛沫が雨となって降り注ぐ瀑布も、剥き出しの黒々とした岩のカーテンだった。遊歩道沿いの土産物屋に並ぶ滝の写真は、水が連なり、一旦盛り上がるようになって落下しているのに、目の前の所々に懸かる滝は、裏側が透けて見えた。落下した水は、幅100mほどの細長く狭い岩の裂け目を流れ、大きく向きを変えて国境の大橋へと向かっていた。

マダガスカル (マダガスカル共和国)

アフリカ大陸の南東海岸部から沖へ約400 km離れた西インド洋にあり、世界で4番目に大きな島である。マダガスカルに付けられた冠は多い。「地球の臍」、「赤い島」、「幸福の島」、「不思議の島」、「祖先の島」、「謎の島」、「アフリカに一番近い国」などなどである。裏を返せば、それだけ特徴があり、魅力ある島、国である。

マダガスカルはアフリカ大陸と共にかつて存在していたとされる超大陸、ゴンドワナ大陸を形成していた。1億年以上前に分離し、島独自の進化をとげてきたと考えられている。加えて、島特有の複雑な地形と気候により、様々な動植物が生息し、その多くが固有種である。なかでも、有名なのが童話の「星の王子さま」に出てくるバオバブの木であり、レムール（原猿類）であり、カメレオンである。

マダガスカル人の祖先は、紀元前5世紀にインドネシアやポリネシアから渡って来たと考えられている。文化的にも言語的にもアフリカ大陸よりインドネシアに近く、アフリカの一部ではあるがアジアに近い。1897年、フランスの植民地になり、60年以上プランテーションや黒鉛の採掘が行われ、モノカルチャー経済化が進み、原料供給地かつ工業製品の市場として位置づけられた。1960年「アフリカの年」に独立したが、政治、経済、軍事、教育などの面で実質的にフランス依存の体制であった。人口の90%が1日2ドル以下で生活し、69%が1日1ドルの国民貧困線以下で暮らしているとされている。労働人口の約80%近くが農業に従事し、コーヒー、バニラ、タバコなどを生産している。低い農業生産性やインフラの未整備で、農業が国内総生産（GDP）に占める割合は約26%（2017年）と低い。

＜ジャカラダの咲くアンタナナリブ＞

マダガスカルの首都、アンタナナリブは、標高1,300mの高地にある。中心部の「独立大通り」は、掘り鉢状の窪地であり、どこに行くにも坂道、トンネル、階段道が縦横に走る「坂の街」であった。斜面を埋め尽す住宅は、折り重なり、屋根のレンガ色、壁の白が映え、遠望する限りは美しい。丘の最も高い標高1,431m、岩崖の木立の中に女王宮殿が建っており、アンタナナリブの街を一望することができた。

独立大通り沿いに、人々暮らしに密着した市場、アナラケリーマーケットがあった。多数の色あせた白いパラソルと常設市場の尖がり瓦屋根が連なっている。マダガスカルは南回帰線が通る亜熱帯の島で、野菜や果物の種類は半端ではなく、食生活の多様性を物語っていた。



果物の隣はコーヒー、カカオ、バニラや薬草のコーナーの売り場で、バニラ独特の甘い香り

が漂っていた。市場は、そこに生活する人々の生の息吹と、豊かさと貧しさをありのまま見せてくれるところだ。

市場の雑踏を抜け出し、石段道に出た途端、炭火で焼いた串焼肉、マシキータが香り、目、鼻、胃袋を刺激した。日本の焼き鳥といった感じで1串5円ほど、美味しい塩味だった。串焼肉の隣では、



清涼飲料の空き缶などで作った10 cmほどの車を売っていた。車輪が回り、車種が解るほど精巧に出来ていた。

街を散策している時、市場でと見る人々の服装が気になった。特に男の労働者を見る限り、極端に色あせた服装で擦り切れ、ほころびが目立つ。手っ取り早く表現すれば、

「貧しい」となるのだが、これを poor にするともっと悲惨な意味になりそうで、言葉にすることに大きな抵抗を覚えた。

<マダガスカルと日本>

日本の国名、ジャパンが世界に広く知られているが、マルコ ポーロの著書「東方見聞録」で、「黄金の国」ジパングに由来するとされている。マダガスカルもまた彼による命名である。マダガスカル主食は米で、一人当たりの年間消費量が120 kgで日本の2倍である。大衆食堂で昼食を頼むとお皿いっぱいのご飯が運ばれてくるなど、近親感のようなものを覚えた。

ディゴ スアレスの北端にある病院の正門を通り、敷地内を通り抜けると海を見下ろすように日本海軍兵士2名の慰霊碑があった。第二次世界大戦中、フランスの植民地だったマダガスカル島とインド洋のシーレーンをめぐって、イギリスを中心とする連合国側と、駐マダガスカルのドイツ寄りのフランス軍並びに大日本帝国海軍との戦い、「マダガスカルの戦い」があった。駐マダガスカルフランス軍の救援要請を受け、日本海軍が潜水艇2隻を派遣した。そして、ディゴ スアレス港に停泊中のイギリス戦艦を大破し、タンカー1隻を撃沈させた。その後、日本兵はマダガスカル島に上陸し、連合軍と交戦となり戦死したという。

日本軍がインド洋を越え、遠くアフリカまで来て戦火を交えていたことは知らなかった。ましてや慰霊碑といわれても知る由もなく、急いで手元のガイドブックを開いてみたが何の記載もなかった。帰国後、前駐マダガスカル大使 山口 洋一 著「マダガスカル」ーアフリカに一番近いアジアの国（サイマル出版）を読み、初めてその詳細を知った。



日本海軍兵士慰霊碑

<ツィンギー>

マダガスカル北部最大の町が、ディゴ スアレスである。港町で古くからヨーロッパ人やイスラム圏の人たちとの交易地、船舶の停泊地として発展してきた。街から南へ100 km、ツィンギーで知られるアンカラナ特別保護区がある。

ツィンギーとは、石灰岩が何万年もの時間をかけて風雨によって侵食された結果できたもので、

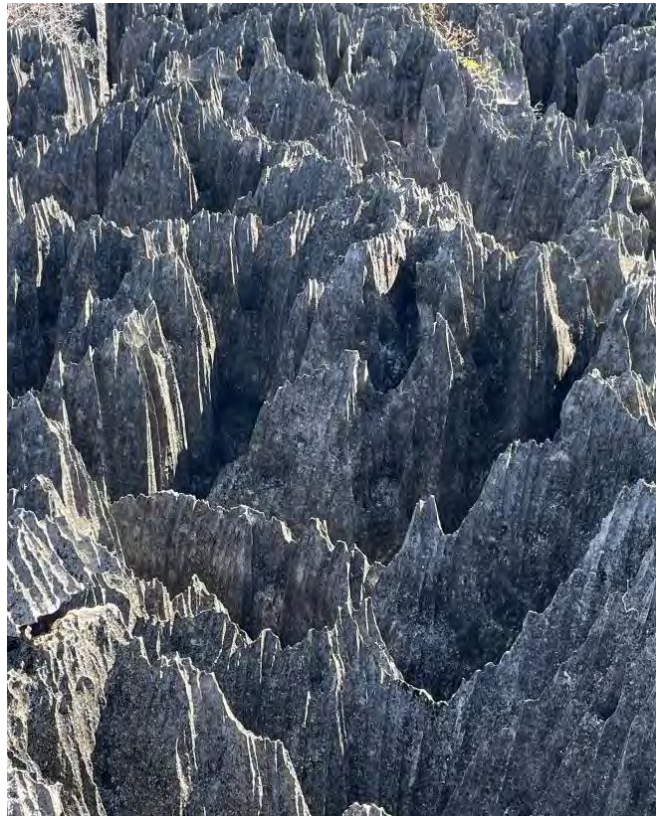
地表は針やカミソリの刃のように鋭く尖がった岩山となり、地下は複雑な鍾乳洞が形成されている。

特別保護区に入るにはマダガスカル保護区管理協会公認のガイドが必要だった。1泊2日、ドライバー付き車をチャーター、テント、食料、燃料、水、ガイドなどなど一切含めて3万円だった。ところで、今、支払った金額は、仲立ちしてくれたペリーさんが大学卒で働いていた旅行会社の賃金が1ヶ月6,000円程だったというから、地元民の数か月分の給料だった。

翌朝、ホテルに新しいランドクルーザーが来た。運転手兼コック、雇用したガイドは公用語のマダガスカル語とフランス語のみだった。ツインギー行に力になってくれた英語を話すペリー女史に同行をお願いした。総勢4名で出発した。途中で食料、その中に生きたニワトリ1羽、水は飲用と洗用、燃料は木炭を買い求めた。

赤土の埃を舞い上げ、荒野を進んだ。途中、道路横断中のカメレオンを見つけては急停車、人骨の横たわる鍾乳洞やパピルスの茂みに入って休憩、木陰から突然走り去る肉食のフォッサの姿に急停車しながら、夕刻にキャンプ場らしきところにテント設営した。

翌朝、ガイド、ペリー女史と私の3人でツインギーへのハイキングが始まった。コースに道標、案内板などはないが、踏み固められており歩きやすかった。岩のごつごつした所で休んでいると、真ん丸い目で、頭部にオレンジ色でV字斑紋のカムリキツネザルが群れで近寄ってきた。手を差し出すと寄ってくる。痩せ細っている様には見えないので、多分に餌ねだりより人間への興味からの行動だろう。また、植物では幹の下に雨季の間に水を溜め、乾季を生きのびるアディーニヤが茂り、



白い花を咲かせていた。そして、森を抜けると荒々しいツインギーが広がっていた。

ツインギーとは、マダガスカル語で「剣山、裸足では歩けない土地」、「先の尖がった」の意味を持つという。濃い灰色の岩が、槍先やカミソリのような鋭利な奇岩群で、天に向かってそそり立っていた。靴のゴム底に全体重を乗けて踏み出すのが怖かった。恐る恐る踏み出してみたが、尖がっ

た岩の先が折れないか心配になった。バランスを崩して転倒でもしたら結果は目に見えている。雨が降っても岩と岩の隙間に吸収されてしまうため、乾燥に強いアロエなどの植物が生き残っており、長い莖の先に真紅の花を裂かせているものもあった。お昼過ぎにキャンプ地に戻った。ニワトリはご馳走に変わっていた。

＜バオバブの木＞

アンタナナリブからムルンダヴァへの飛行機はプロペラ機だった。最終着陸態勢に入り、高度が下がるにつれて機内が急にそわそわした。乗客のほとんどが目指してきた風景、大地に点在するバオバブの木が見えてきた。サン デグジュペリの童話、「星の王子さま」に出てくるので一躍有名になり、見たことがある人よりも名前を知っている人の方が多い珍しい木である。樹高は 20m ほどだが、幹は直径 7m にもなる。幹の中は海綿状で、ここにたっぷり水分を蓄えるので乾燥気候にも耐えるのだという。年輪がないので樹齢を読み取ることはできないが、年に直径 3cm ほど大きくなるという研究があるという。

バオバブの木は、形により 9 種類とされているが、ここマダガスカルに 7 種類が自生し、うち 6 種類が固有種だという。そして、今、来ているモロンダヴァに密生しているバオバブが見事で、一大観光地となっていた。バオバブ茂るマダガスカルの西海岸は、東海岸に雨を降らせた貿易風が、アンタナナリブなどが位置する中央高原から下降してくるので、気温が上昇し乾燥する。草原と疎林のサバナ風景であった。郊外に出ると水田が広がっていた。その先によきによきとバオバブの木が立っていた。大きい、太い。幹の直径は 2m 位あるだろうか、巨大な幹が丸い柱のように大地から立ち上がっていた。そして、地上から 10 数mの高さになって初めて小振りな枝を四方に広げていた。どう見ても見慣れた樹木の形姿とは違う。まるで地中から出てきた柱だ。幹の太さ、形状を見ているとギリシャ神殿のエンタシスの柱に見えてきた。これが道路の両側に数十本も続いているのだから壮観であり、驚きでもあった。

バオバブの木の寿命は、500 年とも 800 年ともいわれる。この地に住むサカラバ族は、バオバ



バオバブの実



バオバブの木々

ブの木を死者が戻ってくる場所として、決して伐採しないのだという。バオバブの木は人と共生する木だという。言い換えれば、人々はバオバブの木に寄り添って住んでいるという。奇妙な形だけに注目してきたが、利用できないところはないといわれている。最も重宝がられているのが食用にされる葉である。乾燥させた後に粉末にして乾燥野菜として使う。葉の次が「サルのパン」と呼ばれる実。果肉は白っぽくてかすかな甘みがあった。その中の種子は炒って食料や食用油を絞るという。幹の皮の繊維は紐や織物に、根は赤色染料に、若木の根はアスパラガスのように食べるという。他に薬用として重要な役割を持つ。葉は下痢止め、整腸作用、樹皮は解熱剤、樹液は歯痛止めなどなどである。「星の王子さま」では、星を破壊する巨木として描かれているバオバブの木は、実際は「宝の木」と呼ばれていた。

＜サイザル麻のプランテーション農場＞ フォール ドーフアン

ベレンティ保護区は、1936年、サイザル麻プランテーション経営者であるフランス人、アンリ・デ・ホルム氏によって設立されたもので、フォール ドーフアンから西に88 km、車で3時間である。今は息子のジャン氏が後継者となり、ホテル、旅行会社、植物園など多角的に経営している。

保護区に入るには、ジャン氏が経営するフォール ドーフアンにあるホテルで、往復の車代、保護区入園料、サイザル麻工場見学料、保護区内ロッジ宿泊料などなど一切の支払いをし、パスポート預かりであった。保護区化された以降、動物の捕獲や樹木の伐採は禁止され、地元の人間数名を監視人として雇用し、宿泊する小屋も用意されているという。ここは乾燥地帯のはずだが、オアシスなのか深々と茂るユーカリを中心にした木々に覆われ、よく手入れ、整備されていた。この環境がそうさせているのだから、ワオキツネザルもシファカも人間を恐れることはなく、手の届く距離まで近寄ってくる。尻尾が体長を越すほどの長さで、日本のサルとは似ても似つかない姿だ。人間とレムールが同居しているのが保護区だった。

保護区一帯は、サイザル麻畑が視界の限り広がっていた。東京ドーム5,350個分の25,000haだという。サイザル麻畑の中央にプライベートの飛行場があった。サイザル麻は細長い剣のような葉を放射状に伸ばし、1.5~2mほどになる。葉の先は尖がっており刺さると痛く、泥棒よけになるという。1株から年間50枚ほど刈り取り、後は残して置くと翌年同じ株から葉を刈り取ることができるという。マニラ麻はバショウ科でバナナの仲間であり、サイザル麻はハリユゼツラン科で麻の仲間ではない。繊維が似ているために麻の名前が付けられたようだ。ガイドの案内でサイザル麻の工場に入った。剣先のような葉はガイド案内でサイザル麻の加工屑に担いで集められ山と積まれ



ていた。これを機械で絞ると、緑色の葉肉は水分とともに溝へと流れ出し、機械の端から白い繊維だけが出てくる。これをしごいて柔らかくしながら乾燥させていた。絞った滓から屑の繊維を拾う人もいたが、こちらは2級品だという。最後に残った絞り滓は肥料に…との話だったが、以前、グアテマラでコーヒー豆を剥いた残り滓を垂れ流ししていたのと同じだった。乾燥した麻は、別の所で圧縮され、大きな束になって出荷を待っていた。

<国立公園・自然保護区のレムール>

鬱蒼とした原生林がのなかに延びる凸凹道の先がキリンディー森林保護区だった。スイスの研究機関が管理、運営しており、地元ではスイスの森と呼ばれていた。世界最小の霊長類であるピグミーネズミキツネザルなど8種類のレムールをはじめ、マダガスカルにおける食物連鎖の頂点に立つ肉食のフォッサやムササビ、さらにはカメレオン、ヘビなどが生息しているという。

日本語のキツネザルは、正式にはレムール、lemur で、語源となったラテン語では「幽霊」を意味し、マダガスカルの人々が昔から霊長類を精霊と考えてきたからだという。現在確認されているだけでも約100種のレムールがマダガスカルに生息し、その全てが固有種だという。ところが、7種が絶滅寸前、19種が絶滅危機、41種が危惧だというから、今の国立公園、自然保護区での保護では十分といえないのが現状である。

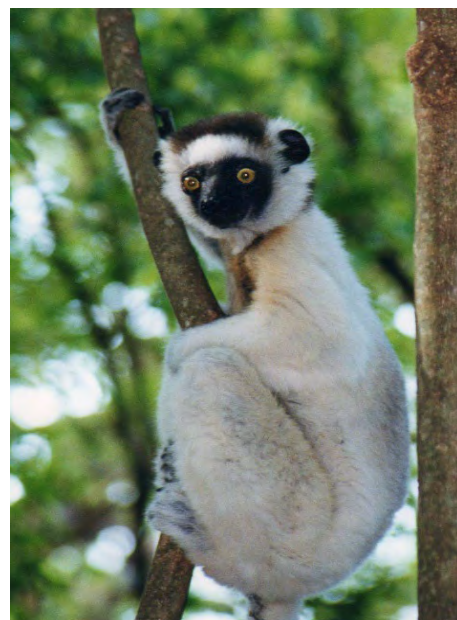
ワオキツネザル（輪尾狐猿）は、その名のとおり尻尾が輪を重ねたような縞々である。四足で歩くときは、派手な尻尾をぴんと立てている。これが群れを成すとなんとも賑やかな眺めになる。また、朝は暖まってから動き出すため、なめし皮の格好で全身を日光にさらしている格好は、無防備そのものの姿であった。

シファカは、別の木に移動するため地上に降りてきた次の瞬間、ピョンピョンと横っ飛びで目の前を横切っていった。滑稽で可愛い光景だったが、もともとは森の中を移動するシファカは、木か

ら木へ飛び移って移動する環境に合わせて四肢が進化させてきたので、他の猿のように地上歩行ができないのだという。シファカにとっては木から木へと連続して移動ができなくなり、止むにやまれず地上に降りてきたので、横っ飛びするより術がなかったのだという。いうなれば人間による自然破壊がもたらした行動で、シファカ本来の姿ではないことを知った。



ワオ（輪尾）キツネザル

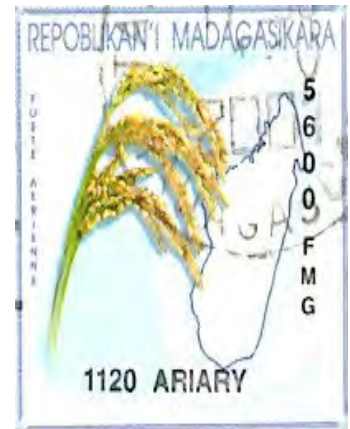


シファカ

＜マダガスカルで語る庄内米＞

首都のアンタナナリボはじめ、何処の街でも中華料理が目立った。マダガスカル料理の食堂でも、ワンタン、春巻、焼そばがメニューにあり、中華料理は完全に定着していた。マダガスカルの南部と東部で水田をよく見かけた。パッチワークのように複雑に畦道で区切られており、山間部を流れる川に沿って小規模ながら棚田も見られた。特別これという見所がある訳でもないが、アフリカで見る一昔前の日本の姿であった。

ベレンティー自然保護区から空港に向かう時、アフリカで獣医をしているという逞しい日本人女性と一緒にになった。レムール、原猿類を調査研究している友人を訪ねてきた帰りだという。途中、谷筋に沿ってわずかばかり穂をつけた水田を見つけ、「あ、田んぼだ！」と叫びながら写真を撮っていた。ザンビアは茶褐色の乾ききった大地で、水田は全く見られないという。



稲穂デザインの切手

マダガスカルは、アフリカでは珍しい1日3食米の国だ。久しぶりの田んぼの風景から、米どころ庄内平野に住んでいること、庄内のある小学校で収穫した米の試食は塩おにぎりでの声が子供たちから返ってきたこと、担任は炊き込みご飯などを予想していたが、子どもの方が米本来の味を知っていたことに驚いたことなどを話している時だった。「私も食べたい!!」の突拍子もない大声は涙声だった。米のないザンビアで1年半ばかり過ごしている間、米の美味さをすっかり忘れていたという。

日本の米は世界でも類を見ないほど美味しい。これを日常の生活の中で学べる子供たちを羨ましがり、普段の学校生活でこの幸せを体験できることの素晴らしさに感動していた。ザンビアでの生活も残り6ヶ月、日本に帰ったら生まれ故郷の富山県の美味しい米の「塩おにぎり」と「美味しい水」が楽しみだと熱っぽく語ってくれた。

＜象鳥 エピオルニス＞

動植物公園の南の隅に、絶滅したマダガスカルの古生物を紹介しているマダガスカルアカデミー博物館があった。恐竜の尻尾の化石に始まり、15種類のレムールの骨格が展示されていた。奥へと進むと、高さ3mを超す巨大な鳥の骨格があった。鳥の概念を完全に超えていた。これこそがゾウをワシ掴みして飛んだというアラビアンナイトに出てくるロック鳥のモデルとなったエピオルニス、別名エレファントバードだった。わずか数100年前までマダガスカルで生きていた鳥である。

現在、地球上で最も大きな鳥はダチョウである。体重はおよそ130kgほどだが、エピオルニスは450kg、小型の牛や馬と同じだったという。ダチョウの卵が20cmに対して33cm。卵の中身は、ダチョウが1～2kgで鶏卵30個



エピオルニスの骨格と卵 左はダチョウの骨格

分ほどに対して、9kgで鶏卵 100 個に相当するという。卵の殻の厚さは、3～4mmと全てが桁違いだ。

ダチョウもエピオルニスも飛べないが、ダチョウは強靱な脚で早く走れる武器を持っている。エピオルニスはダチョウの3倍近い体重を支えるため脚は太くなり、飛べない、走れない鈍重な鳥へと進化した。幸い、天敵のいないマダガスカルで繁栄をすることができた。ところが、ヒトという天敵がヨーロッパから本格的に移動してくるにつれて、卵までも食べられ、16 世紀には絶滅したとされていたが、1840 年頃まで生存していたという記録が残されているという。

お化けともいえる巨大な鳥が、つい最近まで生存していたことは確かである。そして、象鳥エピオルニスもシーラカンスのように、何処かに、まだ生存しているのではと思いたくもなる。そんな謎を秘めているのも、「不思議の島」、「祖先の島」、「謎の島」のマダガスカルである。